

風

韻

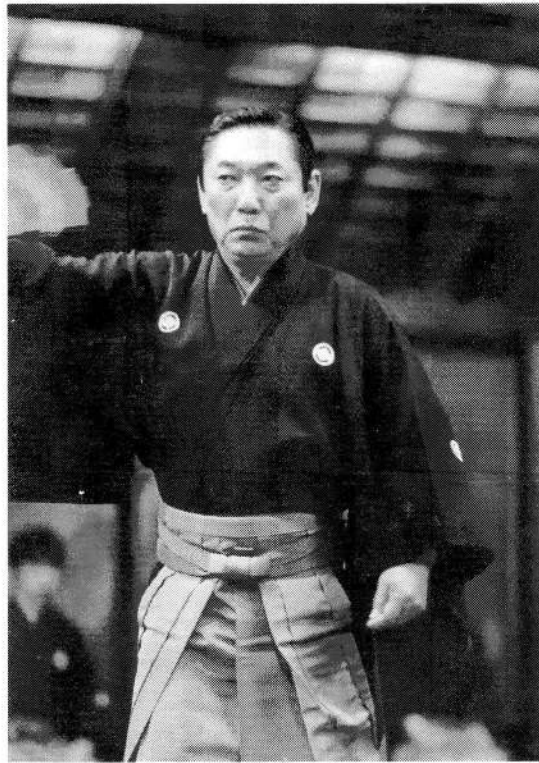
第二八号

(平成二五年二月)

神戸大学風韻会

風韻第28号目次

ご挨拶	師匠 藤井 徳三	3
神戸大学の歴史と能楽部	顧問教官 井川 一宏	4
70周年に想う	神戸大学名誉教授 米花 稔	5
先生方との思い出	神戸大学名誉教授 荒川 祐吉	6
思いつくままに	新4回生 里井三千雄	7
風韻とはなんぞや	新4回生 牧 千雄	8
笛の楽しみ	新10回生 左鴻 雅義	9
60年の心と“風韻の心”	新11回生 前田紀一郎	10
回想	新12回生 佐々木一肇	11
“さまざまな事おもいだす”	新19回生 高島 千明	12
50周年の頃、60周年の頃	新34回生 梅園 健治	13
「学生である」という事	新53回生 上野 佳子	14
2人の会話	新54回生 戸中 希 三澤 範子	15
70周年に立ち会って	新52回生 渡橋 章子	16
70周年の歩み		17
編集後記		20



ご挨拶

師匠 藤井徳三

神戸大学能楽部創部七〇周年周年おめでとうございます。

先輩方から受け継がれたよき伝統を守り乍ら、皆様で謡や仕舞を楽しんでいただきたいと存じます。

時には、なかなか思うように上達しないものだと感じて気落ちする事もあるかもしれませんが、そこで投げ出さずに稽古を重ねておれば、いつしか上達もし、楽しく謡い舞うことができるところと思います。

学生諸君が末永く能楽に親しんでくれることを願うと共に、今後とも貴部の益々のご発展をお祈りしております。

また、皆様もご存じの通り、能楽はユネスコの世界無形文化遺産に栄えある日本第一号として登録されました。このことは、能楽が日本を代表する伝統芸能として世界に認められたという事であり、大変喜ばしく誇らしいことと存じます。

ですが、一口に「遺産」と言いますと、何やら「栄華の夢は醒め今や滅びゆくもの」という印象がいたします。が、決してそうなってしまうてはならないはずで。

能楽が今後一層の隆盛を極め、生きた芸能として後世に継承されますよう、私ども能楽に携わる者としては、たゆまぬ努力を続けていかねばと感じております。

神戸大学の歴史と能楽部

顧問教官 井川 一宏

神戸大学は、今年（二〇〇二年）創立二〇〇周年を迎えました。大学全体の記念式典は、五月一日（土）ポートピアホール（ホール）で開催されました。学部によつては、大学の始まりをもっと遡つて考えようとする場合もありますが、現在の社会学系の学部・研究科のもととなる神戸高商の始まりを統一の開学としています。一月には、社会学系を中心にした二〇〇周年記念の式典が予定されております。

神戸高商は神戸商業大学に昇格し、その第一回（昭和七年）卒業の藤井茂先生（故神戸大学名誉教授、初代能楽部顧問教官）時代、その昭和七年に故宇治正夫先生を師匠にお迎えして発足したのが、現在の神戸大学能楽部の始まりとされています。もちろんそれまでに謡曲部は存在していましたが、宇治先生の社中の命名をいただいた神戸大学風韻会がその後五二年間継続しましたので、風韻会OBが多数となり自然に昭和七年が始まりと定着しました。昭和四十七年、荒川祐吉先生（神戸大学名誉教授）が顧問教官を引き継がれ、一五年後の昭和六二年に私が顧問教官を引き受けてからも、能楽部のために大きな支援を

いただいております。

その間、昭和五九年に神戸大学能楽部として故藤井久雄先生に師匠として指導をお願いし引き継いでいただきました。平成四年に創部六〇周年記念自演会を湊川神社神能殿で行い、能「土蜘蛛」を演じる大きなイベントとなったことが思い出されます。一九九五年神戸の地震の後、神戸大学からの感謝状と銀杯を藤井久雄先生に受け取っていただきましたが、その時、能楽部の指導を藤井徳三先生にお願いすることになりました。早くも今年、創部七〇周年を迎えます。

六月二二日、凌霜謡会がありました。風韻会OBが多く参加されますが、それ以外にも神戸大学の凌霜OBには謡曲をたしなまれる方が多くいらつしやり、年々参加者増えております。能楽部OBの段野治雄・戸次威左武先輩が世話役を引き受けておられますが、私もできるだけ参加しております。その懇親の席で、能楽部七十周年の話題を出したところ、「能楽部に直接関係なくても、学生の能楽部活動を支援してあげよう」と声をあげてください、その場で支援の寄付が六万六千円寄せられました。誠にありがたいことで、感謝に耐えません。

神戸大学一〇〇年の七〇年を能楽部として存在し多くの関係者を持ち、大学の文化活動をささえてきたわけですので、この伝統の重みを感じます。現在は学生部員数があり多くありませんが、能楽部OB会（会長米花稔神戸大学名誉教授）、凌霜謡会の協力をお願いします。神戸大学能楽部の活動を活発にし伝統を維持したいと考えております。師匠の藤井徳三先生には、ご迷惑をおかけし一方的にお願いすることばかりですが、今後と

もい指導のほどよろしくお願い致します。

七十周年に想う

神戸大学名誉教授 米花 稔

平成十四年度が神大能楽部七〇周年といえは発足は昭和七年ということになる。丁度その翌昭和八年、小生は本学に入學した。姫路の商家の父は謡曲に熱心で西宮の村上義一師につき翌年姫路の会堂で「安宅」の披きをしており、その刺激で小生も入学早々入部し宇治正夫先生に手ほどきから習い始めた。従ってそれから六九年になる。先生のお宅に伺って指導を受けた。商売も謡曲も脂ののりきった父が、翌昭和一〇年、四五歳で急逝した。翌春、父の追善謡会に「天鼓」を謡わせていただいたのは、せめて不幸中の幸いであつたといえよう。

大学卒業後数年商社勤務のあと神大に研究所設立と共に研究生活に入ったものの、謡曲は続けたとはいえ途切れがち、学生

の謡会、宇治先生の社中の会などに時に参加する前後の稽古に止まる中、四年先輩の大学の故藤井茂先生の心くばりのお蔭でとにかく謡曲の縁を持ち続けた。私の大学勤務定年の昭和五二年春、宇治先生の風韻会六〇周年記念の大会で先生から「安宅」を奨められ、本気でお宅へ毎週の稽古通いとなった。その折の厳しい御指導、ひとりよがりの戒めに接し、これこそ研究者の姿勢そのものと悟らされた。加えて續く宇治先生の風韻会六五周年で、湊川能楽殿では、家元観世元正師を地頭に迎えての「正尊」のシテをやらせていただいた折、プロとアマの違いを知らされ、謡い一つ身震いする想いであつた。

大恩ある宇治先生は昭和六一年二月御逝去になつた。その晩年、神大能楽部の指導に先生御推薦で藤井久雄先生、その後御令息の藤井徳三先生の御指導で今日に至っている。神大能楽部七〇周年にあたり諸先生、先輩、現部員の努力に敬意を表し、心からお礼とお祝いを申し述べたいと想います。

先生方との思い出

神戸大学名誉教授 荒川 祐吉

私は最近まで、財団法人神戸大学六甲台後援会の評議員をしていました。年に何回か理事・評議員会があり、それに出席すると必ず今は亡き藤井茂先生、そして米花稔先生と顔を合わせたりしておりました。またその他の催し、例えば名誉教授の会、長寿祝賀会でも何時もお目にかかることができました。以前の長寿祝賀会では、私が喜寿の祝賀をしていただきました。長寿祝賀会は六甲台の教職員でつくられている儔友会という親睦団体の催しですが、その時も両先生にお目にかかれると思つて行きましたら果たしてお二人のお元氣なお姿を拝することができました。喜寿の該当者は一〇人程ありましたが、出席したのは私一人でした。

ところで私は昭和二三年から、日本學術振興會産業構造中小企業委員會の研究囑託及び委員として現在まで実に半世紀にわたつて参加していますが、この委員會に加わるようご指導下さつたのは藤井茂先生でしたし、先生のご存命中は委員會開催の度に一緒させていただいておりました。また、米花先生とは、まだ若い頃から、近畿圏、阪神間、そして神戸市等における経

済開発問題を検討する各種の委員会等ではしばしば一緒させていただきました。

このように両先生とのご縁は私の研究者としての生涯の殆どをカバーしているわけで本当に特別の御縁があることを感謝の心と共に折にふれ銘記させていただいております。私が謡のお稽古をはじめさせていただいたのも藤井先生の強力なご勧誘によるものでしたし、そして米花先生とは今も常に元氣にご一緒させていただけるのも謡の取り持つというにいわれない深いつながりのお蔭と思っております。

はつきり言つて謡の御縁が、藤井茂先生、米花先生、そして私の深いつながりをつくり出してくれたものと感謝している次第です。今はお稽古から遠ざかっていますが、風韻会OB会だけは殆ど皆勤、若い皆様方との交流も楽しみです。謡曲のつながりは生涯の宝と痛感しております。

思いつくままに

新四回生 里井 三千雄

今年は神戸大学風韻会創部七〇周年に該る由、ご通知を戴き、歳月の早い経過に驚くと共に心より祝意を表します。

井川先生より時折お聴きしていますが、以前に比べ現役の部員のメンバーが減少している由、少し淋しく思いますが、現在は私どもの学生時代と異なり、クラブ活動も多様化しており、いろんな芸術、音楽があるのでやむを得ない点もあると思いません。

しかし、現在私の関係している大槻能楽堂では、最近若い人や外国人の能楽ファンが増えています。やはり日本の古典芸能や伝統芸術を見直して、その良さを再確認したいと思う層が多し証拠だと思えます。

又、私共OBで結成している凌霄謡会も幹事の段野、戸次両君のご努力もあり、年々会員が増え盛会になっています。学生時代に謡曲を始めたが、社会に出てからは忙しくなかなか出来なかつたものの、会社を定年になり自由時間が出来るようになったので復活したいという方が入会しておられます。

たとえ中断していても、一旦覚えた謡は俗に言う「昔とつた

杵柄」で、少し練習すればまた出来るようになるものです。「継続は力なり」と言いますが、どうか現役の部員の方も、社会に出られてからも謡曲を続けられる様おすすめます。

定年になってから何も趣味のない方は気の毒です。謡曲は奥が深く、内容も豊かで終生楽しめます。

最近、私は謡以外に能芸論の本を読んだり謡蹟紀行に出掛けたりして楽しんでます。

世阿弥の「風姿花伝」や「申楽談義」などは、単に能楽論の域に止まらず、人生の哲学書とも言える深遠な内容を含んでいる様に思えます。又、関西は特に能のふるさととも言える位に、特に京都や奈良は能の史蹟が多く、訪ねられると、その能の由来や歴史が偲ばれ、能楽鑑賞や謡曲の御稽古にも役立つ事と思えます。

最近、左記の本が出版されましたが、現役学生の皆さんが将来社会に出られるにあたり、参考になると思えますのでおすすめします。

土屋恵一郎著『処世術は世阿弥に学べ！』（岩波アクティブ新書一三三）

風韻とは何ぞや

新四回生 牧 千雄

「風韻會」は、故宇治正夫師範社中の名であり、神戸大学にも脈々と伝へられてきた、由緒ある名であることは、ご承知の通りですが永年親しんだ「風韻」と云う字に込められた想ひに就ては、深く考へたことは、ついぞありませんでした。「韻」と云ふのは「音の響き」「音色」「趣のあること」「風流なきま」などと広辞苑にも出ているので、能や狂言を嗜む立場からは納得のゆくところですが、問題は「風」であります。カゼと読むかフウと読むかにも異なりますが、「空気の流れ・ならはし・物事のやり方・なりふり・自然のありさま・感化・噂・風邪」等々、まことに多彩な意味が込められてをり、我國の文化の中で、如何に「風」が人々の心を捉へて来たかが、よく判ります。

流祖世阿弥の聖典とも云ふべき風姿花伝にも、その題名に「風」を標榜してをり、能と風とは不分離と考へていたと思はれます。結局、世阿弥の「芸」は「人に見せて面白き」ものでなければならず、どう云ふ姿(形)を演じれば、どう云ふ「風」に見えるのか、それを演じながら、離見の見で自らを分

析しつつ舞ふと云ふことを、繰り返して花伝書でも説いてをります。大事なことは、これが芸能の神髄であると同時に、人が生きてゆく方法でもあると云ふことです。人は一人では生きられず、必竟、他が自らをどう見るか、また自らを他にどう見せるか、と云ふことが大切で、それを考え且つ実践して「自他不分離」「自他同一化」が果せれば、人が幸になると云ふことでありまして、これこそが、西田幾太郎の哲学の中心命題でもあります。

さう考えれば、「風韻」はなかなか含蓄のある名で、宇治師範の師筋の大槻門が「清韻」であることから発して、恰も観阿弥と世阿弥の關係の如く、宇治門で更に芸風の精神的高みに昇ることを期しての命名ではなかつたでせうか。

和歌の世界でも「風」は無数に詠まれて、謡の中にも採り入れられています。元来、目に見えぬ風に寄せて、自らの心を如何に表現しやうとしたかが、よく判ります。新古今の大切な手法としての「花鳥風月」の中でも、最も「精神的高みを表現するもの」として「風」が意識されていたのも、むべなるかなと思ひます。

「風韻」の想ひを、世代から世代へ申し継ぎ、伝へてゆくことは、かう考へて見れば意味があることです。盲目的な伝統墨守ではなく、日本人の心や生き方として「風」を大切にすることが望まれます。因みにフランス人やドイツ人も同じやうな考へと行動を持つていることも、お忘れなく。

笛の楽しみ

新一〇回生 左 鴻 雅 義

学生時代に友人に誘われて謡曲部に入り、謡と仕舞に夢中になり、それだけでは飽き足らず、囃子にも手を出したのが運のつき。笛の玄人に取りたててもらって、会社生活のかたわらに日曜日に舞台に出演していたが、ついに四〇歳に達したとき一足草鞋のうち会社員を敝履のごとく捨てて能楽笛方專業になつてしまった。小学生時代から体育と音楽は大の苦手だったのに、音楽実技でメシを食うことになろうとは。

能舞台で笛を吹くようになって三〇年余りになった。若い頃はただガムシヤラに吹いていて、それはそれで楽しいのだが、笛を吹く別の楽しさがこのごろになつてようやく少しわかるようになって来た。笛の舞の稽古は一番簡単でポピュラーな「中之舞」から始まり、「男舞」・「神舞」・「盤渉楽」

「乱」等と段々難しい曲を習得していく。若い頃に難しい曲を十分練習するのは当然だが、三〇年も経つと、毎日自宅で練習する曲は「中之舞」である。曲が複雑で指使いの難しい「盤渉楽」などはメロディが変化に富んでいるので間違わずに吹けれ

ばいちおう面白く聞ける。ところが何の要哲もない「中之舞」はただ譜を間違わずに吹いただけでは面白くない。かと言つて奇を衒つては能の本道からはずれる。基本に忠実に、淡々と吹いて、しかも面白みがなければならぬ。そのコツを師匠や先輩は決して教えてくれない。これはライバルにコツを教えないうというケチくさい芸人根性ではなく、たとえ名人と言われる人でも、秘訣を自覚していない、従つて口に出して説明できない、というのが本当のところだろう。そこで自分独自の工夫が必要となる。指の使い方などは低級なことで、小手先の技術の問題ではない。笛は息を使つて音を出すので息づかいにポイントがあるのは当たり前であるが、音が出ていない瞬間、即ち息継ぎの間（ま）も重要である。根本的に呼吸法なのだろうが、腹式呼吸と一口に言つても、それをどう行うかが問題である。もつと追求すれば精神性となるが、具体的な解決策とはならない。そこで色々と工夫をして、舞台に臨む。結果は大抵満足であるが、たまには一応自分なりに満足に吹けたと思うときがあり、嬉しいものである。あと何年舞台に出られるかわからないが、健康に留意して、人々の寿命増長に少しは役立てることを生き甲斐としていきたい。

六〇年の生と“風韻の心”

新一一回生 前田 紀一郎

いきなり大上段の標題を掲げて、恐懼の限りですが、昨年六〇歳に達しいよいよ今夏リタイヤする境遇にて、来し方を何とかと振り返ったり、風韻会〇B会主催の定例謡会に参加するようになった昨今です。

大学卒業後、勤め人生活をヘラヘラと四〇年過こし、人並みに家庭を営み子を成し、ハッピーリタイアメント生活を目前に出来るようになった今思うに、重要な出合いの一つが「風韻会・その師故宇治先生」との出会いです。

当時若い学生は技術の向上に余念がありませんでしたが、先生は折々に“謡の心”を伝えようとされておられた、何かの時「謡う時の座姿は、滝水の真下に座つて水が頭ではね飛ぶことなく、水全体が体を濡らして下に流れ落ちるように。」“無理なく自然に” “自然に融けこみ” 謡の“気持”をそんな表現で私達に伝えようとされたのでしよう。それは、物ごとの心髓とか“格・理・筋”とかを含んでいたように思います。翻弄される流木のような人生を送ってきた今、自然の摂理が大切とえらそうに思う次第です。

“風韻”という言葉を使った文章を司馬遼太郎著「以下、無用のことながら」で発見した時には本当にビックリしました。辞書で引いてみると“風雅の極み”とあり、司馬氏の文章を吟味しながら、前述のような宇治先生の教えを想い浮かべました。〇B謡会は、キラ星の如く輝く先輩たちの生き様を知る機会でした。これからの余録の人生の大きな励みであります。「風韻会」に出会った賜で、とても感謝しています。

追記 昨年蒜山高原に小さなログハウスを建てました。名を借りて「風韻舎」と名付けました。学生諸君の合宿にでも利用してくれると嬉しいですよ。

回想

新二回生 佐々木 肇宏

私をはじめてお能を見たのは、高校に入学してまもない昭和三年のことだった。

お能の演目は、シテ福田源平、ワキ市場豊久両師による「羽衣」であった。講堂兼体育館で、全校生が二回に分かれて鑑賞したが、「能楽をきようはじめてみたという生徒がほとんどで、囃子言葉などがおかしくてクスリとやった生徒もあった（高校八〇周年記念誌）」という状況であった。私もクスリとやったひとりであったが、またいつか、お能を見たいとの余韻は心の中に残っていた。

姫路分校時代の「紅葉会」に、入学早々、知り合つて間もない〇君の誘いで入部してしまったのも、「羽衣」を見た時の漠然としたお能に対する興味があったからだだった。そして、幸いなことに、都留好子師範が指導されていた「紅葉会」には、私のような初心者に謡曲を続けさせてくれる大らかな雰囲気があり、仲間がいた。

謡曲に多少とも馴じてきた頃、シニアに移って、「風韻会」で、宇治正夫師範の指導をうけることとなった。芸道一筋

厳しい芸術観で指導にあたられていた師範も、コンパでは、四十五歳を自称され、ワハハ…と若々しい笑い声で、参加者をケムに巻かれていた。

宇治師範の「風韻会」での指導は、五〇年に亘り、昭和五七年には、神戸の上田観正会能楽堂で、記念すべき五〇周年記念謡会が開催された。当日は、記念会にふさわしい熱気にあふれた舞台を鑑賞した思い出がある。

昭和五九年からは、藤井久雄・徳三師範に「風韻会」の伝統を引き継いでいただき、「能楽部」として、今日、七〇周年を迎えるに至ったことは、本当にめでたいことである。

私自身、七〇年の長い歴史の中で、わずかな一時期を過ごす機会を得、今に至るまで伝統芸術に親しむ生活を送る幸せを感じている。

七〇周年をステップに、能楽部のさらなる発展を心から願う次第である。

“たまごまな事”

おもいだす”

新一九回生 高島千明

芭蕉に“さまさまの事おもいだす桜かな”の句がある。お盆の墓参りというのも、いろいろな事がおもいだされる。殊に今年には私にとつて、“さまさまの事おもいだす墓参り”となった。教職に就いて初めて赴任したのが夢前高校であった。当時、福崎高校の分校で、一学年二クラス。入学してきた生徒が卒業するまでの三年間に一度は授業で顔を合わせる事ができた。職員室もごんまりとしていて、暖かい雰囲気があり、当時の女子職員が、今もお盆の前後に顔を合わせる。

その折に、私は飾磨郡夢前町神種（このくさ）善随寺にある宇治正夫先生のお墓にお参りさせていただく。先生自筆の墓標を見ると、「風韻会」のなつかしい文字、笑顔、声が想い出され、先生が迎え下さっているような気がする。お墓に手を合わせ、後を振り向くと竹林。見上げると、今年台風の影響で曇り空に濃いブルーがのぞいている。この空がまっ青の年もあった。夢前富士とも呼ばれるならかな稜線を描く明神山の

山懐に抱かれた静かなたたずまいの中でしばらくボーっとしていたい気分になる。

今年、八月十八日のこの日、夕刻家路につく時、東の空に虹がかかった。

翌朝、宝塚の宇治先生のお宅へ稽古に伺っていた頃、途中、仁川にある先輩のお墓に時々、お参りしていた事を思い出した。七〇年安保・学園紛争と真摯に向き合っていた彼女は、大学の授業が再開していく中で自らの命を絶った。

九・一一以降の米国の動き、国内の諸々の政策のゆくえが気にかかる。沖縄では普天間代替基地が浮上型から、藻場・サンゴを埋め立てる、期限なしの型に変更されるとか。三〇年余前彼女の・私の前であった課題が今も目の前にある事を思う。

宇治先生が“上手に謡おうと思わなくていいんですよ”と言われた事があった。最近になって（今頃になってというべきか）その意味に気付く事があった。

若い頃、謡の練習を一緒にしていた、今は七十代後半の方が、最近、フラダンスの練習を始められ、その発表会を見せていただいた時の事。彼女は間違えないよう必死だったそうだが、私の目には品のよい体の動きが印象的であった。若くてしなやかな動きの人もあったが、素人のちよつとした手足の動きにも、その人の品性が表れている事に、内心ギクツとしたのである。

私は今も、声量がなく、お腹から声を出す呼吸法が掴めなく苦労している。

謡に出会った三十年余年前、そして今も私の前にある課題（謡に限らず）に私なりに取り組む事、それが、へたでいい、

私の謡・仕舞になるのだとこの頃思う。

五〇周年の頃、六〇周年の頃

新三四回生 梅園健治

今年で神戸大学能楽部（風韻会）が創部七〇周年とのこと。大変めでたいことだ。僕が風韻会に入部したのは丁度二〇年前。長い歴史の中で、僕が関わったのはほんの一部ではないのだが、幸いタイミングがよかったのか、五〇周年、六〇周年と記念大会に二回も参加することができた。これを見ながら、当時を振り返ってみようと思う。

五〇周年を迎えたのは昭和五七年。僕が大学に入学した年で、新入部員勧誘の時も先輩が「今年は創部五〇周年で、秋には大会があるんだよ」と言っていたのが思い出される。当時、自演会は通常、校内の仮設舞台で行われていたが、記念大会と云うことで初めて能楽堂で行われた。

風韻会は創部以来、宇治正夫先生がずっと指導されてきた。記念大会は「観世」誌にも紹介されたが、記事には「(他にも長く続く能楽部はあるが)、同じ師匠が五〇年に渡って指導を続けている例は初めて」と書かれていた。宇治先生の指導方針は素謡、仕舞を徹底して稽古することであり、大会にはその集大成として、実に九番の素謡、二十五番の仕舞が出された。また当時は卒業後も先生の元で稽古を続けられる方も多く、当日の番組には十七人のOBの方が名前を連ねていた。そういえば、当日、宇治先生を慕って顔を出されたOBの方も多く、会の後の打ち上げも、OB、現役合わせて五、六〇人ぐらい参加で、大変盛り上がっていたなあ。懐かしい。

六〇周年記念自演会

(平成四年十二月二十一日 湊川神社神能殿)

五〇周年の二年後、藤井久雄先生が宇治先生から師匠を引き継がれた。六〇周年記念大会は、その藤井先生のご尽力で創部以来初の学生能が実現した。先生はかなり前から、事ある毎に「記念大会には学生さんの能を出そうと思ってます」とおっしゃ

五〇周年記念秋季大会

(昭和五七年十一月二十一日 上田能楽堂)

っていた。かつて京大も指導されていた先生にとつて、学生能はそんなに特別なことではなく、神戸大の学生にも是非させてやりたいと思われていたようだ。曲目は「土蜘蛛」。僕はどうしてもこの歴史的瞬間に関わりたくて、先生にお願いし、地謡に入れてもらった。申合せの当日、シテが蜘蛛の糸を放った瞬間、それを見た地頭の先生が「ほほう！」とうれしそうにうなずかれ、そして「やっぱり土蜘蛛は得な能やねえ！（素人がやってもサマになるの意）」とニコニコしながら話し掛けてくださったのが懐かしい。

大会はその学生能を中心に盛り上がり、夜の七時まで続いた。他にも囃子までオール神戸大キャストで実現した舞囃子。五〇周年に続いて仕舞を出された戸次先輩、伏見先輩。三番続いた先生、OBによる素謡。多彩な番組だった。現役部員の参加も実に二十三人。神戸大学能楽部の最後（とならないことを願いたい）の全盛期の感。番組を見ると当時の興奮が甦って来る。

さて、七〇周年記念大会はどんな会になるのだろう。規模は別にしても、是非これら両大会のように「記憶」に残る会にしたいものだ。現役の皆さんの奮起を期待しています。

「学生である」という事

新五三回生 上野佳子

一年生のある日、藤井先生に稽古をつけて頂いた日でした。お稽古事にはとんと無知で、能楽についても雀の涙ほどの知識しかない私は、その日「習物」というものがあるのを初めて知りました。本来、そうした演目は免状を頂いていない私たちには許されないにも関わらず、藤井先生は笑って（苦笑いして？）許して下さいました。

私たち学生は、「学生である」という理由だけで、一般の方より優遇されています。先生に教えて頂くのにかかる費用は大学が補助してくれますし、自由に練習できる部室が用意されています。部室には高価な形付や能関連の書籍、先輩方が残して下さった大量の謡本があるため、自分で一冊一冊買い集める必要もありません（自分の謡本が増えていくのも、ラジオ体操のスタンプ的爽快感がある気がしますが）。学生料金で能舞台を鑑賞出来るのも大きな特権です。藤井先生が大目に見て下さったのも、私たちが「学生だから」ではないか、と思います。

「今、能は若い人たちから縁遠くなっている。私たち学生は、普段そうして能を学ばせて頂いている代わりに、もっと深く能

の世界に入り、もつと同世代に能を広めていかなくちやいな
い。それが使命だ。」

細かい文言はうる覚えですが、後日先輩が話して下さったこ
の言葉が忘れられません。このように恵まれた場で学ぶ以上、
その分の責任も負っているのだと悟りました。

とりあえず、部員獲得にがんばるぞう、が当面の目標です。

二人の会話（七〇周年のある日）

新五四回生

戸中 希

三澤 範子

ある昼下がりの食堂にて、お茶を飲む二人。

三澤「今日は部活があるのう、駒之段覚えてなくてさあ大
変。」

戸中「早上覚えなあかんなあ。連吟だけと違って他にもお

ぼえるべき事はいっぱいあるで。」

三澤、まったりと茶をすすする。

三澤「上回生はもつといっぱいあるみたいだなあ（詠嘆）」

戸中「部員少ないから大変なのかもよ。一回生私ら二人だ
けやし。」

三澤「二人とも農学部だから他学部の一回生も欲しい所だ
ね。いつも言われるけど能楽部は知名度が低いわ、
絶対！ 神大に能楽部があることを知らないの
よ。」

三澤、膝を打つ。戸中も思わず打つ。

戸中「いや、でも実は私も知らなかったよ。先輩に勧誘さ
れてなかったら今頃は弓道とかやってたかもね。

今の若い人達で“能楽”という言葉を聞いたこと
はあってもそれがどんなものかまで知っている人
は少ないと思う。」

三澤「私も知らなかったもの、能と歌舞伎がどう違うかも
分からなかったし。“平成の三之助”みたいなのが
いれば若い女性にも受けるんじゃないの。うちの部
にもそういうキャラがいれば安泰かしん。」

戸中「そんな無責任なこと言つて。三澤がやつてよ。」
三澤「え……!?!」

お茶がすっかり冷めた頃、今日の練習も頑張ろうと思ひ席を立つ二人であつた。

七〇周年に立ち会つて

新五二回生 幹事長 渡橋 章子

思い返せばおよそ三年前、受験勉強を終えたばかりの三月、解放感に浮き立つ心も手伝つて、「そうだ、能を観に行つてみよう！」と軽いのりで能楽堂に足を向けた私がいました。当時は能楽への漠然とした好奇心があつただけで、まさか後に自分が能楽部に入部する事になろうとは、想像していませんでした。ですから、今こうして自分が能楽部に所属し、かつ頼り無いながらも幹事長という任にあるという事が、今更ながら不思議に思えます。特にこの一年間、私が幹事長としての務めや日々の稽古から逃亡する事もなくやつてこられたのは、諸先生・先輩方が温かく見守つて下さつたお蔭であり、また現役部員が力を

つくしてくれたお蔭であり、本当に感謝の念にたえません。神戸大学能楽部は今年で創部七〇周年を迎える事となりました。その歳月を噛み締めるべく、「七〇年」という年月について考えてみたりした訳ですが、どうもリアルに感じられないのが現実で、それにもどかしさを覚えてしまいました。このままではいかん：と思いつつ、諸先生・先輩方がお寄せ下さつた「風韻」の原稿を読んだり、また編集の参考にと過去の「風韻」を読み返したりなどする内、何となくわかつてきた事があります。それは、この「七〇年」が単なる歳月の集積ではないということ。「能楽」を媒体として様々な人と人が出会い、交流し、日常の稽古や発表会を通して共有される「記憶」。その積み重ねの結果、「七〇年」という歳月を生み出したのだということ。そのことに気が付いた時、「七〇年」という歳月を今までになく親近感をもつて見る事ができたように思います。今後とも神戸大学能楽部の歴史が「七〇年」を越え、「八〇年」「九〇年」：と続きますよう、確実に能楽部の伝統を伝えていくと共に、私個人も一能楽部員としてできる限り成長できたらと切に願います。稽古不足で「退化」してしまつたり、思うように上達しないと悩んだり：。なかなか悩みは尽きませんが、日々の稽古に打ち込むことで、少しでも能楽の深遠な世界が理解できるようになるのでは、と自らを励ましています。最後にりましたが、お忙しい合間をぬつて私達に稽古をつけて下さる藤井先生、様々な助言、協力をいただきました井川先生をはじめとする諸先生方、先輩方に厚く御礼申し上げますと共に、これからもよろしくお願ひ申し上げます。

神戸大学能楽部 七〇年のあゆみ

「風韻」第二六号及び、段野治雄先輩(新一三回生)からお寄せいただいた資料を元に、能楽部の歴史を綴ってみました。

西 暦	年 号	月 日	主 な 出 来 事	世 界 史
一九一五	大正四		観世流「青瓢会」発足(詳細不明)	一九一四 第一次世界大戦勃発
一九二六	大正一五		「鞍馬会」、盛会(伊勢普宣師)	一九二五 治安維持法成立
一九三二	昭和元	四	藤井 茂先生(風韻会初代会長) 神戸高商にご入学 宇治正夫師による最初のお稽古(於 学生集会所)	一九三二 上海事変
一九三三	昭和八	一二・二五	神戸商大謡曲大会(於 神戸商大講堂) 宇治先生御指導下の最初の大会。素謡三番 仕舞九番 独吟五番 番囃子一番 舞囃子一番 連吟一番 「鞍馬会」から「風韻会」に改称	一九三三 国際連盟脱退
一九四七	昭和二二		(この間、記録無し)	一九四五 終戦
一九四九	昭和二四	五・一五	戦後、大学の部活動中最も早く復活 神戸大学発足	
一九五四	昭和二九		学生連盟謡曲コンクール開始	一九五六 国際連合加盟
一九五七	昭和三二		三大学交歓会(現 旧三商大交歓発表会) 開始	
一九六一	昭和三六	三・二六	会誌「風韻」創刊(現在、二七号まで発刊)	

一九六二	昭和三七	五	串カツ屋「猩々」開店（於 開学記念祭） 赤字財政脱却の希望の星 五〇円/皿 後、「猩々」はおでん屋 ↓ 焼鳥屋 という歴史をたどる 風韻会三〇周年記念大会（於 神戸大学講堂） 四大学交歓謡会（現 三大学合同舞台）開始 四大学とは神大、甲南、商大、女子薬科大で、例年の女子薬科大との交歓会が発展したもの。現在は神大、甲南、関学 姫路分校の鶴甲移転に伴い、風韻会姫路支部が鶴甲風韻会と改称 教養部にジュニア部室獲得 都留好子先生謝恩謡大会（於 姫路本城能楽堂） 姫路支部風韻会の都留好子師への謝恩謡会。素謡、仕舞 連吟。参加数七二名	一九六四	昭和三九	六一 六・一四
一九六五	昭和四〇	四・一五 一一・二九	現部室へ移転（「やや狭いがこぎれい」との記述あり） 神戸大学風韻会発表会開始（於 六甲台講堂） 顧問 柚木学長急逝により二〇日の予定を延期。舞囃子四番 番囃子一番、素謡二番、仕舞三二番、連吟九番 ジュニア合宿開始（於 摩耶山王蔵院） 現在は人員不足の為此の行事は行われていない。	一九六六	昭和四一	？
一九七〇	昭和四五	一一・二六	大学紛争のあおりで活動混乱。春合宿中止 串カツ屋「猩々」全共闘に屋台を壊される（於 学祭園遊会） 応急処置の後、営業続行。 学連秋季大会謡曲コンクール廃止。合同能開始「紅葉狩」 藤井教授定年御退官祝賀記念素謡会（於 六甲松泉館） 素謡一七番、仕舞六番、舞囃子、独吟、連吟各二番 新会長に荒川祐吉先生就任される	一九六六	中国文化大革命 一九六九 月面着陸	一九六四 東京オリンピック 開催

一九七七	昭和五二	？	神大風韻会四五周年	一九七三
一九七九	昭和五四	九・一	第一回風韻会OB会開催(於 蘇州園)	オイル・ショック
一九八二	昭和五七	一一・二二	参加二四名	一九八〇
一九八四	昭和五九	三・一七	五〇周年記念秋季大会(於 上田能楽堂)	イラン・イラク戦争
			素謡九番、連吟二番、仕舞二五番、舞囃子六番	勃発
			三二回生歡送議會	一九八三
			宇治正夫師御指導下の最後の大会	藤井久雄先生自叙伝
		四・三	藤井久雄先生にご挨拶	「鶏肋抄」刊行さる
		四・二一	藤井久雄先生による最初のお稽古	
		五・二七	藤井観謳会春之会に初出演(連吟「楠露」)	
			「風韻会」から「神戸大学能楽部」へ名称変更。	
			宇治正夫先生逝去される	
一九八六	昭和六一		新顧問教官に井川一宏先生就任される	
一九八七	昭和六二	四	神戸大学能楽部六〇周年記念自演会(於 湊川神社神能殿)	
一九九二	平成四	一一・六	史上初の学生能「土蜘蛛」を演能	
一九九五	平成七	七・二〇	藤井徳三先生が新師範に就任される。	一九九五
一九九七	平成九		以来、現在に至るまで丁寧にご指導下さっている。	阪神大震災
一九九八	平成一〇	二・二一	藤井久雄先生逝去される。	
二〇〇〇	平成一二	六・三〇	関西学生能楽連盟を脱退。	
二〇〇二	平成一四	一一・一五	藤井 茂先生逝去される。	
			神戸大学能楽部七〇周年記念自演会(於 藤井観謳会舞台)	

編集後記

○ 「風韻」第二八号をお届けいたします。

お忙しい中にも原稿をお寄せ下さった先輩方には厚く御礼申し上げます。

早くから原稿をいただきましたにも関わらず、発行が遅くなりまして申し訳ございません。

○ 能楽部に限らずこのクラブも部員減少に悩む昨今ではありますが、少人数であるからこそ可能なこともあるのではないかと思います。

一〇年、二〇年後に私たちの伝統を伝えるべく、精一杯取り組んで参ります。
未熟な私どもではございますが、どうぞよろしくお願いいたします。

編集者 渡橋 章子

藤原 雅樹